

論文審査要旨及び担当者

報告番号 甲 乙 第 号 氏名 白鳥 義博

論文審査担当者

主査 慶應義塾大学文学部教授 松田 隆美
文学研究科委員、D.Phil.

副査 慶應義塾大学文学部助教授 河内 恵子

副査 オクスフォード大学セント・アンズ・コレッジ
英文学部専任講師、Ph.D. トーマス・キーマー (Thomas Keymer)

学識確認 慶應義塾大学文学部教授 巽 孝之
文学研究科委員、Ph.D.

論文題目 'Narrative and Nation in Henry Fielding's Later Writings'

白鳥義博君による博士号請求論文、'Narrative and Nation in Henry Fielding's Later Writings'は、18世紀イギリスの作家ヘンリー・フィールディング (Henry Fielding; 1707 - 1754) が晩年の約十年間 (1745 - 1754) に発表した作品に焦点を当て、イギリス国家の問題に従事するフィールディングの政治的な立場や活動と、物語作家としての彼の文学観や創作活動との相関性について検証している。1745年のジャコバイトの反乱に際して、フィールディングはハノーヴァー王朝を支持する姿勢を鮮明に示した。また、1748年から死の直前まで首都ロンドンの治安判事として活動した彼は、近代国家イギリスの秩序構築に携わった。こうした国事への関与の過程で示される、フィールディングの政治的な問題意識は、物語作品のなかにどのように投影されているのか。さらに、国事への関与が深まるにつれて、文芸創作者としてのフィールディングはどのように変化したのであろうか。本論文はこうした問題意識を原動力としながら、「君主制」、「国民国家の編成」、「世論」、そして「ジェントルマンの国家貢献」といった政治的なトピックを取り上げ、晩年のフィールディングのなかで、物語への文学的な関心と国家への政治的な関心とがどのような関係にあったのか、その諸相を検討している。

論文は、序論を含めて5つの章から構成されている。

Introduction

- Chapter 1 “Benevolence and Authority”: Fielding’s History of English Literature
- Chapter 2 “Love and a Cottage”: *Amelia* and Great Britain
- Chapter 3 “That Tremendous Court of the Public”: *Amelia*, Elizabeth Canning, and Public Opinion
- Chapter 4 “In the Form of a Passenger”: *The Journal of a Voyage to Lisbon*

Bibliography

論文の概要

1752年、フィールディングは *Covent Garden Journal* 誌の第23号に、いわゆるイギリス文学に関する初めての通史となる、短い英文学史を発表した。第1章「『慈悲深い権力』 - フィールディングの英文学史」は、この「英文学史」と、1749年の小説『トム・ジョウズ』という二つの作品に密着して、ハノーヴァー王朝支持者としてのフィールディングの君主観が、作品内にいかに反映されているかを検証している。「英文学史」のなかでフィールディングは、英国文壇はアレグザンダー・ポープの時代にはポープを頂点とした「専制君主制国家」であったが、1744年のポープ死後は「無政府状態」に陥ったと記している。一見するとこの文学史は、専制君主制への復古を求める反動的な文学・政治観の表明として読めそうであるが、フィールディングがハノーヴァー王朝支持者であったことを思い起こせば、このような解釈は成り立たない。ステュワート王朝の復活を求めた1745年のジャコバイトの反乱に際して、フィールディングはハノーヴァー王朝を支持する政治的な文章を複数発表しているが、その中で彼は現国王ジョージ二世を「慈悲深い君主」として賛美し、ステュワート王朝の専制君主を批判している。この「慈悲深い君主」という理想の統治者像は、彼が書いた英文学史では描かれないが、しかし小説『トム・ジョウズ』では、物語の主要登場人物オールワージの描写を通して具現化されている。オールワージの屋敷パラダイス・ホールは、自由で開放的な真の楽園空間としてイメージされており、また熱心なハノーヴァー王朝支持者である主人公トムは、物語の結末でパラダイス・ホールの継承者に指名され、熱烈なジャコバイトである隣の地主ウエスタンの一人娘と結ばれる。祝祭的なこのエンディングは、ハノーヴァー王朝が、ジャコバイトを取り込んでゆくことで更に栄えるという政治的図式を示唆するとともに、「文芸国家」を安定させる新たな語りの形式の誕生

を予感させる。しかしそれは、同じく君主継承の比喩を用いて、専制君主制から無政府状態へという歴史像を示した英文学史のエンディングとは鋭く対立する。両作品を隔てる3年間の間に、イギリスの君主制はより堅固なものとなっていたにもかかわらず、フィールディングは文学的には無政府状態であると断言するに至った訳だが、白鳥論文は、この変化は、この期間に発表された小説『アミーリア』に対する酷評に起因すると結論づける。フィールディングは文学史を執筆することで、英文学という制度が、国民国家同様に、無政府状態から脱する一助となることを望んだのである。

第2章「『愛と田舎小屋』 - 『アミーリア』とグレート・ブリテン」では、従来「問題作」あるいは「失敗作」と酷評されてきた1751年の小説『アミーリア』に焦点を絞って、国民の適切な配置による国家秩序の構築を求める治安判事フィールディングの政治観が、物語にどのように投影されているかを考察している。この作品では、理想の君主像を問題とした前作『トム・ジョウンズ』とは違って、国民国家における理想的な国民像が重要な主題のひとつとされている。作品冒頭で語り手は国家をひとつの機械に見立てて、イギリスという大きな機械を滑らかに動かすためには、個々の細かい部品が適切に配置されることが重要であるとの見解を示している。一方、小説家としてのフィールディングは、ヒーローとヒロインが結婚へと至る過程を描いた前作とは違って、主人公の結婚生活の諸相を物語るという、いわば新領域を開拓する野心を抱いていた。これら二つの問題意識は、特に物語のエンディングにおいて、激しく衝突している。男性主人公ブース中尉は、愛国心と家庭愛とのはざままでジレンマに悩み続けたあげく、最終的に軍務から離れて妻の実家に隠遁する。ブースが抱くジレンマは、治安判事と小説家という二つの役割を持ったフィールディング自身のジレンマを示唆しているとも解釈できる。本章の結論では、ヒロイックな軍務生活ではなくて国家活動からの遁世に主人公の理想郷を実現したこのエンディングにこそ、前作『トム・ジョウンズ』に劣る作品として低く評価されてきた『アミーリア』を再評価する手がかりがあることを示し、本作品の斬新性を指摘している。

第3章「『公衆という名の恐ろしい法廷』 - 『アミーリア』、エリザベス・キャニング、世論」では、1753年のパンフレット『エリザベス・キャニング事件の真相』や小説『トム・ジョウンズ』など、様々なフィールディング作品を対象に、世論が国家、国民、そして文学に対して持つ力と意味について複数の角度からの考察を行う。ジョン・ロックは、『人間知性論』の中で、人が不正を行うのをためらうとすれば、それは、神や法の処罰よりも、むしろ周囲の人間からの悪評や嫌悪を恐れるが故であると喝破し、世論は、宗教や国家を凌駕する強い力を持ち得ると指摘した。本章は、世論の働きに対するフィールディング

の観察を詳細に検討している。『トム・ジョウズ』や『アミーリア』のような小説作品は、世論が、個としての市民の生活のみならず「政府」や「裁判所」にも強い影響を及ぼすありさまを、丹念に記録している。実人生においても、フィールディングは世論の力を極めて具体的に意識していた。小説家として、いわば世論形成をリードする立場にあった一方で、小説家および治安判事としてのフィールディングの活動は、世論の厳しい批判を受けることもあった。フィールディングと世論との間の緊張関係は、自作『アミーリア』に対する「模擬裁判」の様相を記録した文章や、いわゆる「エリザベス・キャニング事件」に対する治安判事としての所感を綴った文章などにうかがい知ることが出来る。本章は、小説作品と同時に、これらのいわゆるノン・フィクションのナラティブ作品にも目を配りながら、「法廷としての世論」という近代国家の新しい政治的な力に対するフィールディングの態度を多角的に分析している。

第4章「『ひとりの旅客の状態で』 - 『リスボン渡航記』」は、遺作となった作品『リスボン渡航記』に密着して、文学への関心と政治への関心とが最終的にどのような調和へと到達したのかを分析している。物語と国家との相関性という観点からアプローチしてみると、この旅行記が、フィールディングの国家貢献の最後のあり方を明らかにするだけではなく、同時に、彼の創作活動の最終的な到達点をも示している点で、決して看過することの出来ない重要な作品であることがわかる。明日をも知れぬ命であった作者が、転地療養先のリスボンへと向かう船旅を渡航記にまとめて出版すること意図したのは、そもそもなぜなのか。ひとつには、国家の辺境の地に潜む様々な政治問題を告発し、解決の手がかりを公表することを、旅するジェントルマンの責務とフィールディングが考えていたからである。それでは、真のジェントルマンとしてイギリス国家に奉仕するフィールディングは、物語の語り手としては一体どのように読者に「奉仕」しているだろうか。この旅行記が娯楽性に乏しいという評価は根強い。しかし、娯楽性の欠如は、語り手が国家に関する問題に没頭するあまり、物語を疎かにしているからではない。政治的な話題から離れたとき、フィールディングは、語り手と読み手との新たな関係性を模索する、語りの実験を行っているのである。フィールディングにとって『リスボン渡航記』とは、国事への新しい関与のあり方と新しい物語領域の創造という二つの欲望を満たすための場であったと、本章は結論づけている。

以上のような論考を踏まえて、白鳥論文は、国家に関する政治的な問題に没頭しつつ、同時に物語作家としての新しい境地の開拓に挑戦した意欲的な作家像を、晩年のフィールディング諸作品から看取できることを最終的に確認している。

審査の要旨

以下、2003年12月22日(月)に行った口頭試問の質疑応答をもふまえて、審査委員会の所見を要約する。

白鳥論文は、1745年以降のフィールディングの活動に関して、独創的かつ斬新な視点から検討した、学術的貢献度の高い論考である。白鳥君は、フィールディングに関する今日の研究状況に精通しているのみならず、18世紀イギリス文学とその時代の文化状況についても、広範かつ最新の知見を有している。これまでに論じられることが少なかったフィールディングの小説以外の作品 - 治安判事という立場から書かれた文章、紀行文、*Covent Garden Journal* を初めとする定期刊行物に寄稿した文章など - を丁寧に分析することで、これらが、小説作品の分析に対して重要な意義を持つことを、明晰かつ熟慮された英文により、極めて説得力のあるかたちで提示している。

4章全体を通底している方法論は、フィールディングの小説家としての業績や野心と、治安判事としての、社会・政治的事象に関する書き手という公的な役割との間に生じる、緊張関係やパラドックスを特定し、その諸相を明確に描き出すことである。さらに、フィールディングがいかにして、そうした緊張関係やパラドックスの解消をなし得たか、あるいはなし得なかったかを、子細に検討している。第一章ではそうした視点で、「英文学史」を通底する政治的なメタファーに注目し、さらに『トム・ジョウズ』における政治的意義の分析へと議論を発展させている。2つの作品の結末の違いを、『アミーリア』が冷遇されたことによるフィールディング自身の自信の喪失に結びつける議論には説得力があるが、政治的なメタファーの利用に関しては、たとえばサミュエル・ジョンソンの『英語辞典』の評価をめぐるチェスターフィールド卿の文章など、文学的評価の位置づけをめぐる同時代の他の用例にも目を向けて、更に議論を展開できたと思われる。

『アミーリア』を論じた第2章では、この自信の喪失というテーマが、18世紀中葉を国民創世の世紀と位置づける Linda Colley の議論に関連づけられて、独創的に展開されている。フィールディングは、国民国家にとっての公益を重視する発言を公の場で多くする一方で、牧歌的な隠遁を最終的に評価するような小説を書いていた訳だが、本章は、『トム・ジョウズ』との比較を通じて、『アミーリア』における政治性と物語性とのバランスを指摘し、この作品が持つある種の過激さを浮き彫りにすることに成功している。論者が指摘する過激さの性質を、文学史的な文脈でさらに解明すれば議論はより強固なものとなったであろう。

第3章で論じられている世論形成の問題は、ユルゲン・ハバーマスの18世紀ヨーロッパにおける公共圏の出現に関する研究以降、18世紀文学研究にお

いても主要なトピックとなっている。こうした研究動向を考慮するならば、白鳥論文は、集団的なイデオロギーとしての世論も、マキアヴェッリ、ロック、ヒュームなどの世論に関する見解も、いわゆるゴシップや噂も、十分に区別することなく同列に論じている感がある。議論の前提として、より繊細な「世論」のカテゴリー化が望まれる。また、18世紀のイギリスで、フィールディングが作家および治安判事として形成されるにあたって世論が果たした役割が過大評価されているという指摘もなされたが、しかし世論に注目した視点の確かさは、審査委員全員が高く評価する点である。白鳥論文は、フィールディングが *Covent Garden Journal* 第7-8号に発表した文章や、エリザベス・キャニングの失踪をめぐる実際の裁判に関して記した文章などに注目することで、自分の評判を気にする『アミーリア』の男性主人公と、作品の評価を案じる作者フィールディングとを並列的にとらえることに成功し、小説家と世論との関わりを具体的に描き出している。この章は、フィールディングの小説以外の文章が、小説の解釈に活用された成功例であると言えよう。

『リスボン渡航記』に関する第4章は、転地療養のためにただ受動的に運ばれるだけの旅に関してわざわざ旅行記を残した、フィールディングの書き手としての意識に注目しているが、この視点は極めて自然な形で、論文全体の結論へと帰着している。フィールディングは、自らをただ運ばれるだけのヒーローに仕立てることで、代表作となった『トム・ジョウンズ』における散文による喜劇的叙事詩という枠組に対してある種のパロディを提示し、新たな散文フィクションの可能性を模索していると言える。船上の出来事を批評的に詳述することで、フィールディングは自らをモニター、すなわち忠告者として位置づけており、その旅はある意味で、船上に全世界を視る一種のグランド・ツアーであったと考えられる。そこに、政治的分析対想像上のナラティブという二項対立を乗り越えて行こうとする、新たなフィールディングの作家としてのスタンスを読み取る論考は、まさに本論文の最後に相応しい、説得力のあるものである。

全体を通じて、白鳥論文は、一貫してテキストの細部と微妙なニュアンスを大切にした、フィールディング解釈を提示しており、またテキストを同時代のより広い文化史、文学史的文脈に位置づけることにも成功している。そのように精緻なテキスト分析と目配りに裏打ちされた論文であるが、審査委員会の全体として高い評価のなかで、いくつかさらなる発展の可能性が示された。白鳥論文は、フィールディングの文学史、小説、裁判に関する文章、旅行記といった様々なジャンルの作品をバランス良く論じ、それらに共通して、公人と小説家としての相反するフィールディング像が存在することを論じているが、こらら自作のテキストのジャンルの差異について、フィールディング自身はどのよ

うに認識していたのであろうか？テキストの機能を、ジャンルの要請との関連で考えることで、自説をより強固にできるとともに、フィールディングと他の同時代作家との比較研究のための方法論の構築にも繋がるであろう。またフィールディングの全体像を描く上でも極めて重要な『アミーリア』の分析においては、ヒロインのアミーリア自身の思想的革新性にも注目することで、この作品の斬新さを、18世紀イギリス小説史のなかにより明確に位置づけることが可能となったであろう。

フィールディング研究は、代表作『トム・ジョウズ』を中心として展開されてきた。特に晩年の文芸活動については、『アミーリア』の評価が低かったこともあって、等閑視されがちであった。白鳥論文は、晩年のフィールディングを、自らの政治的立場の明確化に伴って、自身を国民国家への忠告者、すなわちモニターとして位置づけるべく新たな語りのスタンスを構築しようとした、積極的な実験者として描き出すことに成功している。この視座は18世紀小説研究全体に対しても大きく寄与すると思われるので、今後さらに、この論文で描き出した晩年のフィールディング像を核として、初期のフィールディングの小説作品の解釈、そして同時代の作家との比較研究へと発展することが期待される。かくして審査委員会一同は、白鳥義博君の博士号請求論文を、文学博士号を授与されるに相応しい論文であると判断する。